様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０１７３

研究課題名（和文）福永晴帆研究―客観的評価の確立と教育学研究への展開―

研究課題名（英文）A study of Fukunaga Seihan's technical background. -A project to educational activities

研究代表者
松久　公嗣（Matsuhisa, koji）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：００３８０３７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：美術史上の評価が定まっていない福永晴帆とその作品について，宗像大社御便殿に現存する襖絵や腰障子絵の調査を中心に，視覚的効果の高い模写による実証的研究を通して技法や材料的な側面から晴帆の芸術性を分析した。また，晴帆のご息女ならびにお孫さんへの取材調査によって，色紙作品75点と直筆覚書他の資料を発見し，晴帆の画歴や人物像の一端を明らかにした。本研究の成果は，「福永晴帆日本画展」（2014.6.3-6.29，海の道むなかた館）を開催して広く公開する。

研究成果の概要（英文）：I have analyzed the artistry of Fukunaga Seihan about himself and his work of art in technical and material aspects through empirical research of ectype with a focus on the reseaches of Fusuma-e or Koshi-shoji-e extant in Munakata-Taisha shrine. Also,we have turned up his 75art works on colored paper and autograph note and other material by having an interview with Seihan's daughter and grand son to show history of his works and a part of his personality. We are planning to release production of this study widely by exhibition "Fukunaga Seihan Japanese Painting" (on 2014.6.3-6.29).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：福永晴帆　日本画　保存修復　宗像大社　文化財

１．研究開始当初の背景

福永晴帆（1882－1961）は山口県出身の日本画家で，森寛斎に師事した後，欧州に８年間留学したとされている。また同郷の伊藤博文との交流を深め，皇族や政治家，財界人の庇護のもと意欲的に制作をおこなった。御室仁和寺白書院に残る襖絵（1937）が有名だが，晴帆に関する研究は国内外ともに皆無で，同門とされる山元春擧と比較して知名度や研究量において対照的な扱いとなっている。これは，晴帆の制作・発表活動が特定のパトロンを中心としたもので，一般的に作品が流通しにくかったことや，帝展等の団体を嫌って保守的な日本画壇における地位の確立に執着しなかったことで，作家や作品に関する研究が進まず，美術史上の評価が確立されていないことが要因として考えられる。さらに代表作品は皇族や皇族縁の寺社へ奉献されたものが多く，一般公開されている仁和寺の襖絵を除いては，宗像大社儀式殿御便殿襖絵のように皇族御休憩室を飾る目的として描かれるなど，研究対象とすべき作品の所在確認が困難な環境にあったことも影響している。

申請者は，大学の地域連携事業の一環として地域が保有する文化財の調査をおこない，宗像大社との連携協力に関する覚書締結の中心的役割を担った（2007 年 12 月）。その際，靖国神社から移築された儀式殿御便殿の襖絵とその作者である晴帆を知ることとなったが，作品の高い芸術性に反して作家に関する資料は乏しく違和感を覚えた。作品は御便殿と侍従控えの間を隔てる四面構成の表面「桜図（仮題）」と裏面「鳥図（仮題）」，ならびに廊下に面する腰障子絵四面×二室，床脇天袋四面および地袋二面で構成されている。主要な画面となる「桜図」は，伝統的な画題となる満開の桜が盛上げ胡粉という古来の技法によって表現されているが，近世の日本画作品と比較して空間表現や幹の描写方法における洋風表現の影響が顕著である。他の画面では，琳派のたらし込み技法や円山派の写実性を継承した描写が見られ，渡欧前に師事した森派の祖となる円山派の技法に止まらず，他の流派の技法を貪欲に習得しようと試みた画家の真摯な態度がうかがえる。各画面の脇に記された落款や印章ならびに作品の由来を示した神社の記述等から晴帆作品の真作と確認した。

２．研究の目的

美術史上の評価が定まっていない福永晴帆とその作品について，宗像大社御便殿に現存する襖絵や腰障子絵の調査を中心に，視覚的効果の高い模写による実証的研究を通して技法や材料的な側面から晴帆の芸術性を分析する。また，晴帆のご息女ならびにお孫さんへの取材調査によって，新たな資料の発見につとめるとともに，独自に作品収集と調査・分析を進めて，晴帆の作品研究を深める。

本研究の成果は，学校教育を中心とした社会への還元方法を確立することで，図画工作科や美術科の教科におけるカリキュラムとして持続的に反映できることを目的としている。また，劣化し失われつつある貴重な文化財をその危機から守るとともに，地域の文化財を活用する文化庁重点施策において，そのモデルとなるような具体的実践研究と成果が見込まれる。

本研究は，本格的な保存修復ならびに教育学的展開へと繋げる第２ステージを想定した基盤研究と位置づけられ，本研究の成果をまとめた段階あるいは第２ステージ内での展覧会開催を目標の一つとする。

３．研究の方法

独自調査において晴帆の次女がご健在であることが判明し，晴帆の遺品・資料の中に『現代畫壇の超人　福永晴帆畫伯會趣旨』（昭和５年）を発見した。これによって画業の一端が解明され，他の寺社や皇族へ献上した作品内容の記述等によって作品の所在が明らかとなった。さらに画論などを記載した和綴じ本「直筆覚書」を発見し，その口語訳ならびにデータ化を開始する。また技法に関する補助資料として色紙作品を 75 点入手し，筆法を中心とした技法の確認が可能となった。すでに 12 点の軸作品と１点の額作品，1 点の水彩画を収集しており，ご息女が有する 3 点の本画を含めて 17 点の本画研究資料を確保している。

(1)寺社や皇族へ献上されたとする作品の確認と保存状態に関する調査および制作年代の特定
(2)作品収集の継続と収集した作品に関する技法の分析および制作年代の特定または推定
(3)ご息女に対する取材調査・・・作品や画材，遺品の調査，家族の視点から捉えた人物像の集約
(4)画論・画稿および文献の分析
(5)模写制作をとおした実証的検証

最終年度には調査・分析結果をまとめて福永晴帆研究を総括するとともに，客観的評価に基づいた美術史的価値や芸術的価値を根拠として，保存修復事業に向けた研究体制の整備と新たな科研費申請に取り組む。

４．研究成果

(1)　晴帆が 50 代の円熟期に描かれた宗像大社の襖絵〈桜図〉は，日本画の伝統的なモチーフである山桜を描きながらも，洋風の空間表現を金箔の砂子技法で表し，冴えた墨の色で堂々たる老木を表現している。桜花は伝統的な四条円山派の写実表現を基に盛上げ胡粉の技法を駆使して描き，赤みを帯びた葉は代赭の絵具に金泥をたらし込む琳派特有の技法を融合するなど，一つの流派に固執しない晴帆の思想や技法が結集した作品である。本研究の基礎的研究として，研究協力者：尾立和則と共同で，この襖絵の損傷状態

と保存処置および修理に向けた調査をおこなった。作品の置かれている保存環境は良好であるが，基底材となる料紙の褐色化と盛上げ胡粉の粉状化が顕著で胡粉の層状剥離と欠損が著しい。さらに調度品の用をなす襖絵の宿命でもあるが，亀裂痕や上擦れによる傷，しみやカビもあり，下張り構造の不備を含めて早急に対処する必要性が指摘された。これは仁和寺の襖絵にも共通する懸案事項で，一般公開されている仁和寺の作品では展示・保存環境の悪さに雨漏りの痕跡も加わって深刻な事態を招いている。

また，靖國神社に残る資料を調査し，靖國神社行在所襖絵として現宗像大社襖絵が描かれた由来の一部が明らかとなった。襖絵の基底材となる和紙に関する記載も見られ，再現模写にむけた資料が収集できた。

(2)　これまでに収集した作品を合計すると29点の掛軸作品を収集することができた。その中でも，晴帆筆「軍旗図」は晴帆の画歴の内，天皇拝謁を裏付けるもので，晴帆直筆の箱書きによってその詳細が確認できた。

晴帆の作品には軸箱が共箱で保存されている事例が多いが，直筆の箱書き等によって制作年代が検証できる。今後も継続した資料収集を行い，画歴と作品の分析・整理を進めていく。

また一般的に認識されている晴帆の画歴のうち，森寛斎を師とする記述の妥当性について，寛斎の愛弟子である春挙の資料を検証したが証明するものは無かった。寛斎と晴帆の師弟関係については当初より疑問視していたが，改めて再考の必要性を確認できた。

(3)　晴帆の経歴は不明瞭な部分が多いため，まず一般的に公開されている経歴をまとめ，その事実関係について調査を開始した。これにより以下の事が判明した。

これまで彼は 1897（明治 30）年に京都にて森寛斎に師事していたとあったが，寛斎は1894（明治27）年に逝去しているためこの記載は正確な情報ではないことがわかった。また，文展に出品し入選したとあったが，彼は1922（大正11）年の第四回帝展において，「世尊增降誕」（二曲一隻）を出品し入選していたことが判明した。

また，古墨・古硯の収集家としても知られており，ご息女への取材から『古墨私觀』（昭和 6 年 6 月 27 日初刊）を入手することができた。これにより，古墨や古硯に関する研究をおこなうとともに，南画調の水墨画もよく描いた晴帆の制作理念が明らかとなった。

同じく，ご息女から提供された資料『現代画壇の超人　福永晴帆画伯会趣旨』では，陸軍少尉：内藤貞一らが発起人となり，晴帆の画業を称えている。また，九州でも『十人会』が結成され（西日本新聞社講堂（チラシ）より），内閣書記官長・運輸大臣を歴任した楢橋渡や，西鉄三代目社長であり西鉄ライオンズ球団の社長も務めた木村重吉などとの交流が明らかとなった。

平成 24 年 2 月 23 日に，晴帆の次女である武登苑氏が他界された。ご高齢にも関わらず聞き取り取材へのご協力ならびに貴重な資料のご提供を頂いたことで晴帆研究は飛躍的に進行した。感謝とともに心よりご冥福をお祈りしたい。

(4)　本学大学院生：青木朋子を研究協力者に加え，読み下しを終えた「直筆覚書」について口語訳と内容の分析を行った。ここで示す晴帆の覚書とは，ご息女の元に残されていた 3 冊の和綴じ本である。覚書は全文が 82 ページ，28 項目からなる。自作のものと思われる漢詩 3 篇も含まれる。

日付が記載されている 11 項目を整理することで，1938（昭和 13）年から 1948（昭和23）年に記載された箇所と，その期間を含む前後の期間に書かれたものと推定する。覚書に書かれた内容は多岐に渡るが，大きく分けると「戦争」「美術」「生活」の 3 つの題目に分けることができ，特に戦争に関係する記述が多いのは，覚書が書かれた時代的背景と彼の交友関係が関係していると考えられる。絵に関する自他への厳しい態度が一貫しており，孤高の精神とプライドの高さが窺える。

(5)　大学院開設科目「日本画特講」ならびに「絵画技法演習」において，宗像大社をフィールドとした研究課題の発見や寺社曼荼羅に見る日本独自の遠近法に関する課題を設定し，模写における古典技法の習得も含めて保存修復事業に繋がる研究環境ならびに連携組織を整備した。また，学部開設科目「表装演習」においては，研究協力者：尾立による表装技術の演習を取り入れ，研究に関わる可能性のある学部生の基礎能力の向上を図った。

晴帆の絵画論や技法について，実践的に検証する方法として，宗像大社儀式殿に現存する腰障子絵の模写制作を行った。模写に当たっては，古色を表現した現状模写の形式をとりつつ，明らかな染みや汚れは除くことで，制作当時の技法の検証も重視した。大学院生による現状模写は平成 24 年度に八点中六点が完成した。平成 25 年度からは本学「ものづくり創造教育センター」に「模写研究室」を得て，「腰障子絵（福永晴帆　作）」八面の完成に至った。この研究によって，晴帆の画論と彼が習得した技法の関係性を実証することが可能となり，西洋の絵画を長期にわたって学び，日本の伝統的な技法と融合した新様式によって制作された宗像大社襖絵の成立過程をまとめることができた。

描かれている題材は菫，れんげ草，ふきのとう，あざみ等様々な草花で，その芽吹きを表現することにより春の到来を感じさせる作品である。和紙を基底材として，中目から細目の砂子を蒔いた抽象的な空間の中に，墨

や緑青，群青，朱，山吹等の限定された日本画絵具と金泥を巧みに使い分けて表現されている。この模写制作を通して以下のことがわかった。
・8 点一組の作品であるが 1 点ごとに絵画作品として構成されている。
・下絵や見当をつけた後が見当たらないため，小下図あるいは実寸大の下図を作っていた可能性が高い。
・砂子を蒔く量を調節して粗密を作り，画面に抽象的な空間を表現しようとしている。
・砂子は恐らく晴帆自身が空間表現として蒔いており，描画前と描画後に分けて効果を確認しながら表現されている。
・砂子の蒔き方は腰障子絵のそれぞれの場面として繋がっており，入念な構図を作成後，制作に当たっていたと想像できる。
・墨の線を生かした筆法や美しい墨色にこだわった個所が見受けられる。
・四条円山派の写生に基づく絵画表現を基に，琳派の手法である垂らし込み技法を融合した表現がされている。
・彼は一般的に南画家として紹介されているが，南画家の表現手法では留まらない日本画の技法を駆使している。
・腰障子絵に描かれた花は，開閉時の擦れによって絵具が剥離しており，それぞれの花の色が着色されていた。
・近世の襖絵とは異なり空間を意識した表現が行われ，独自の洋風表現が融合されている。

さらに，大学連携を強化する佐賀大学日本画研究室にも依頼して，佐賀大学大学院生：坂本英駿を研究協力者に加え，青木とともに再現模写制作を行った。

以上の調査研究成果を基に，今後も様々な側面から作家・作品研究を深め，襖絵ならびに腰障子絵の保存修復事業に向けた取り組みを継続していきたい。

紙や木，土や生き物といった自然由来の素材を生かし豊かな自然と共存する日本の文化は，自然の驚異と対峙しながら，いつしか朽ちていく宿命を持つが，これら人類共通の遺産である文化財を最良の状態で〈記憶〉して後世につたえることは，先人の魂や尊厳を敬うとともに未来を支える子どもたちの心の育成にも重要で，日本の自然美や人のつながりを大切に思う心を培う糧となる。

近年，文化財を精度の高いデジタルデータとして〈記憶〉する技術開発が進化している。そこで文化財を高精細に記録し再現性に優れたデジタル情報の形で〈記憶〉することで後世に継承することのできるデジタルアーカイブ化が望まれている。

文化財に関しては現状が最良の状態と言えることから，劣化が進行する前にその最良の状態をデジタル的に〈記憶〉することが重要で，このデータを基に，以下の活用を検討していきたいと考えている。
①『福永晴帆日本画展』開催を機に，さらに晴帆の作家・作品研究を深化させて，未確認作品の調査を継続するとともに，経歴・画歴の整理と資料のデータ化を進める。
②宗像大社に現存する襖絵について保存修復事業を計画し実践する。その過程は全て高精細なデータで記録し，これまでに蓄積したデータとともに教育アプリの開発に向けた統一化を図る。
③タブレット型端末機を想定した教育アプリを産学連携で協同開発し，芸術学および文化財科学の成果を学校教育および生涯教育を通して継続的に社会へ還元するモデルの構築を図る。

これは，教育学との複合的研究によって芸術学および文化財科学の成果を継続的に社会へ還元するモデルの構築を目的とするもので，ICT 化が進む学校教育において先駆的な研究となるだけでなく，未来の社会を担う子どもたちが，地域に現存する文化財を通して日本の伝統文化への理解を深めることを志向するものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）
①「福永晴帆研究－客観的評価の確立と教育学研究への展開－」，<u>松久公嗣</u>，2012 年度大学美術教育学会，大分大学，2012.10.21.
②「直筆覚書にみる福永晴帆の人物像とその背景」青木朋子（研究協力者：福岡教育大学大学院 教育学研究科美術教育コース），2012 年度大学美術教育学会，大分大学，2012.10.21.

〔その他〕
展覧会：「福永晴帆日本画展」，福岡教育大学日本画研究室（<u>松久公嗣</u>准教授）・海の道むなかた館　共催，海の道むなかた館常設展示室，2014.6.3.-6.29.

６．研究組織

(1)研究代表者

松久　公嗣（Matsuhisa, Koji）・
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：００３８０３７９

(2)研究分担者

加藤　隆之（Katoh, Takayuki）・
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：７０５７２０５６

(3)連携研究者

藤田　志朗（Fujita,Shiro）・
筑波大学・人間総合科学研究科・教授
研究者番号：１０１８１３５６

坂井　孝次（Sakai,Koji）・
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：８０３４６７３３

(4)研究協力者

尾立　和則（Oryu,Kazunori）・
文化財保存修復家

青木　朋子（Aoki,Tomoko）・
福岡教育大学・大学院教育学研究科・学生

坂本　英駿（Sakamoto,Hidetoshi）・
佐賀大学・大学院教育学研究科・学生